

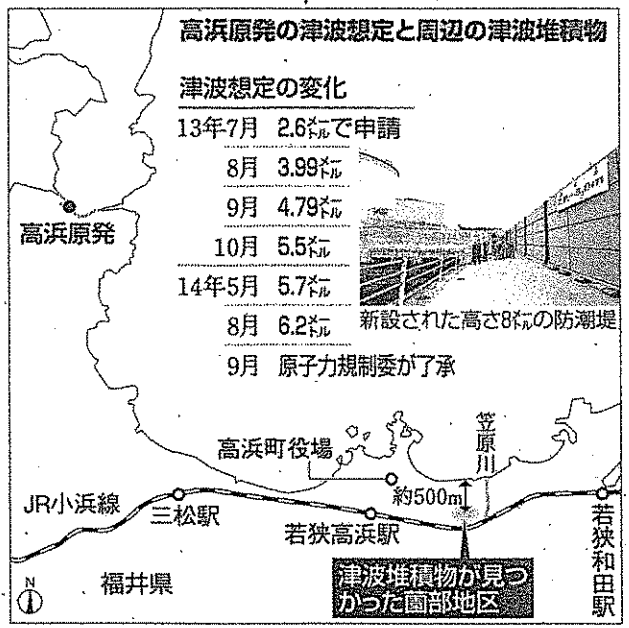
高浜の津波想定 十分？

相次ぐ引き上げ 新たな痕跡も

29日にも3号機が再稼働する関西電力高浜原発（福井県高浜町）は、新規制基準に基づいた原子力規制委員会の審査で、想定する最大級の地震の揺れや津波の高さが引き上げられ、対策も講じられた。だが過去の津波をめぐる新たな調査結果も明らかになってきている。▼1面参照

3、4号機の審査で、関電は揺れや津波高の設定の甘さを指摘された。想定する最大級の揺れは550ガルから700ガルに、津波高は2・6倍から関電の計算ミスもあって段階的に6・2倍に引き上げられた。関電は取水口に高さ8・5

師の防潮ゲート、放水口に8倍の防潮堤を設けるなどの対策を講じた。揺れや津波高の想定は、過去の災害の文献や、地震などの調査が根拠になる。高浜原発周辺への津波については、ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスの「日



再稼働を問う

本史「や京都の神社に伝わる「兼見卿記」といった文献に、天正地震（1586年）のころに若狭に大津波

専門家「先入観は持たずに」

だが、規制委の審査と並行して、文部科学省の日本海地震・津波調査プロジェクトの一環で、福井大の山本博文教授が高浜原発から約6km離れた高浜町内で地質を調べたところ、海岸から500mほど内陸で津波堆積物を確認。昨年5月、14〜16世紀のものと推定されると発表した。津波は近くの川を逆流したと考えられるという。約1千年前と5千年前の地層からも津波堆積物が見つかった。 「いつ、どれほどの高さの津波があったか突き止めたい」。山本教授は試料の分析を進めている。

が押し寄せ、多くの人が死亡した旨の記述がある。若狭湾に原発がある関電、日本原子力発電、日本原子力研究開発機構は、若狭湾周辺の津波堆積物を調査し、2012年に「大規模な津波の痕跡はなかった」と発表。関電は高浜3、4号機の審査で「原発の安全性に影響を与える規模の津波痕跡は認められない」と説明し、規制委も新たな知見があれば反映するよう求めたうえで、大筋で了承した。

この結果について関電は昨年12月、「堆積物が津波起源だとしても原発に影響を与える規模ではなかったと考えている」と規制委に報告した。規制委は「新しい情報があれば、審査が終わった原発でも必要に応じて検討する」としている。過去の地震や津波の文献調査に取り組み敦賀市立博物館の外岡慎一郎館長（日本中世史）は「現在ある情報を元に対策が取られたと思うが、それ以上の高さの津波はないという先入観は持たないほうがいい。自然は常に人知を超えるものだ」と語る。（福島慎吾）